

# 子どもは世界と出会い、 生きることを感じている

関山隆一

(保育園園長)

子どもは自然を感じています。私は、横浜にて自然を活用した「森のようちえん」と呼ばれる幼児の保育実践を行っています。毎週、近くの「緑道」と呼ばれる自然公園に出かけ、週に2回はおにぎりやパンを持参し広大な緑地のどこかでお昼を食べています。その場に着いた途端、親御さんの作ってくれたおにぎりを食べる子もいますし、遊びに夢中になりお昼の時間をとくに過ぎた頃、ようやくおなかがいってきたので食べる子もいます。緑道の自然には子どもたちを夢中にしてくれる何かがあるようです。

日本の自然の良さは四季があることだと、毎日緑道を眺めていると感じます。それと、この緑道は多種多様な植物が生い茂っています。たくさんさんの野花在咲き、実のなる木、匂いのする花、木登りのできる木、さまざまなどんぐりなど、子どもたちが感じるといふことを通して知ることのできる世界があります。また、緑道ではたくさんさんの生き物との出会いがあります。ダンゴムシを帽子いっぱい捕まえたり、ザリガニ釣りをしたり、クワガタやカブトムシを見つけ出したり、さらには、冬眠しているカエルまで見つけ出したりしま

す。これはただ単純に子どもたちの視力が良いからというわけではありません。私はこれを「狩猟の目」と呼んでいます。子どもたちは日常の野外生活の中で、周囲環境をくまなく見るようになり、生き物が普段どこにいて、どこに隠れているのかが、わかるようになるのです。それは大人が気づかないようなことまでも発見します。驚くほどの感覚だと思っています。

**子どもは雨も感じます。**園から外に出ると、空に向かって口を開け、雨を味わったりします。また、水たまりに吸い寄せられるように座りだし、ジーと水がしみてくる感覚を味わっている子もいます。さらに、ある雨の日、何人かの園児が大きな木の下にて、木に手を当てている光景を目にしました。近づいてみると、木から流れ落ちる水を指の間の水かき

で受け止め、その水が指の間に一瞬たまることを楽しんでいたのです。このような繊細な感覚をもっている子どもたちに感嘆します。

**子どもは冷たさも感じます。**せせらぎの水が凍ったとき、その水を手にして遊びます。でも数秒後には手が痛くなり水を離します。冬でもはだしになって、せせらぎに近づき、その水の冷たさを感じます。室内にいたら、一定の温度や湿度に保たれていますから、こんな感覚は味わえません。

**子どもはモノを感じます。**多くの子どもたちは、棒を持ちます。もちろん、そこに用意されたものではありません。自分で見つけ出し、わずか数か月の赤ちゃんでも持つたりします。握る感覚を味わったり、ジーと眺めたり、食べたりします。幼児は、たくさん拾っ

て基地を建築したり、チャンバラをしたり、棒にまたがり電車ごっこをしたり、いろんなことを想像し、創造します。

**子どもは人の心を感じます。** 2人の3歳児が坂上<sup>のぼ</sup>りをしているときでした。Mくんは、初めて坂上りに挑戦していました。しかしその後すぐに、下を見たMくんは下りることが怖くなり、泣いてしまいました。それを見ていたTくんはMくんの手を握りながら、さらにその光景を下から見ていた5歳児の子たちも遠くからまなざしを送り、Mくんのことを気づかっています。その後、みんなに見守られながら、Mくんはゆっくりと坂を下りることができました。



このようなことは、日々よく見られます。泣いている子に「いいこ、いいこ」と頭をなでたり、ズボンの裾が引っ掛かって困っている子がいると他の子が裾をたくし上げたり、人が困ったり悲しんでいる姿を見て、人の心を感じとったりします。それ私たちは「子どもってすごいなあ」と、ほほ笑ましく眺めています。

**子どもは想定外を面白がります。** 急に雨が降ったり、風が吹いたり、涼しかったのが急に暑くなったり、去年たくさん食べた桑の実が今年あまり採れなかったりすることがあります。子どもも想定外なことがたくさんあります。出発前にトイレに行つて、「トイレ大丈夫」って言ったにもかかわらず、急にうちがしたくなったり、朝「今日は遠い池まで行く」と言ったにもかかわらず、緑道に入つてすぐに、せせらぎでオタマジャクシがたく

さんいたので、それを捕ることに夢中になり  
目的の場所まで行けなかったり、緑道を歩い  
ていると、いろんなモノやコトに魅了されま  
す。子どもたちは、「みちくさ」が大好きです。  
そんな「みちくさ」という想定外を想定内と  
して、私たちは面白がっています。

### 親も、子どもの姿を通して感じる時があ

ります。当時5歳児の親子のエピソードです。  
週末に家族で街に出かけようと、子どもに提  
案したのですが、子どもは、「ザリガニ釣りが  
したい」としか言いませんでした。その後、  
親はついにあきらめ、子どもの願いどおり緑  
道のせせらぎに行つてザリガニ釣りを楽しみ  
ました。親は、子どもが本当にしたいことが、  
普段緑道にて過ごしていることであり、さら  
にその遊びを両親と一緒にしたかったことを  
感じ、自分と子どもの違いを知りました。

子どもは遠くで起こっている世界のこと  
も感じています。下記は、5歳児の子どもと担  
任の対話です。

**S** 「戦争つてなんで起きるか、知ってる？」  
**担任** 「うーん、むずかしいねえ」

**S** 「そうだね……戦争が起きたらやだな。だ  
つてお父さんとお母さんにも会えなくなっ  
ちゃって働くんだつて。キッズ(保育園)  
にも来れないし」

**担任** 「そうだね……みんなが大きくなる頃には  
世界から戦争がなくなつてたらいいなあ」  
**S** 「ほんとだねえ。鉄砲じゃなくて水鉄砲な  
ら、みんな悲しくならなくて楽しいのにな  
え。肌の色が違っても、話しあえばわかり  
あえるのにね」

日々子どもたちと共にし、対話を聴いてい  
ると、子どものほうが大人よりも本来の人間  
らしい人間ではないかと思うことばかりです。